

第34回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員長 谷川 彰英



第34回東書教育賞受賞の先生方、本日は誠に
おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。
私は、中央教育研究所の理事長として、
また審査委員会の審査委員長を務めましたので、
その立場からICTを除いた全体の感想と、小中
学校の最優秀賞の2編の論文について講評を述
べさせていただきます。

小学校の最優秀賞は熊本市立日吉東小学校、
田山雅博先生。「『社会に開かれた教育課程』の
実現を『総合的な学習の時間』から」というタイ
トルで、現代のカリキュラム・マネジメント
の事例として、見事に展開されております。こ
のあとで中学校も紹介いたしますけれども、最
優秀賞に関しましては、例年ですと本当にいろ
いろな意見が出されて議論を尽くすところですが、
今回のこの2編の最優秀賞に関しましては、
非常に高い評価を得、異論なく決定いたしました。

2016年に熊本の大地震が起こって、その翌年
に田山先生が日吉東小学校で実践をやるよう
なりました。ところが、たまたまその時期
に新聞記事で、明治22年に同じ地域に熊本の大地
震が起こり、その大地震にまつわる数え歌が
作られて伝承されてきていたということがわかり
ました。そこで現代風の熊本の大地震の数え
歌を作ろうという活動が始まったということ
です。きわめてはっきりした意図で、多様な活動
と緊張感の中でも非常にのびのびとした子ども

たちの姿が描かれていて、見事な実践だったと
いえると思います。また、新学習指導要領との
兼ね合いでいいまでも、カリキュラム・マネ
ジメントの新しい方向を示しているということ
で、たいへん示唆に富んだ実践になっておりま
した。数え歌は1から20まで作っているの
ですが、一つだけ紹介します。1番「石垣瓦天守閣
／熊本城は崩れ落ち／最後に残った石一つ」。
こういう歌も子どもたち自身が調べながら作っ
ていったという実践です。

中学校の最優秀賞は、埼玉県所沢市立三ヶ島
中学校の校長先生、沼田芳行先生です。「未来
を拓く学校づくり 朝鑑賞を土台としたチーム
ミカジマの挑戦」。これも見事だと私は思いま
した。朝鑑賞とはどういうことかという、金
曜日の朝10分間、教室で先生と生徒が美術鑑
賞し、日ごろ語り合えないような話をしていく
中で、いろいろな考えが浮かび交流ができる
という、そういう活動を毎週1回だけやる
ということですが、これは他教科との連携を
生む、あるいは高校や大学との連携を生む
ところまで発展しているんですね。私はこの
実践を拝見していて、沼田先生の学校経営
能力はすごいなと思いました。私自身は筑
波大学の最後は附属学校11校の校長たち
を管理・運営する教育長という立場でした。
その経験からいいますと、学校経営って
そう難しい話ではなくて、すぐできること
は結構いっぱいある、すぐできることに自信を

もって着手できるかどうか、その点でこのささいな10分間の活動に着手されたことは、非常に共鳴をさせていただきました。

生徒の感想です。「この時間は自分と向き合い、考えることのできる貴重な時間です。この時間があることが、ふと立ち止まれたり、友達の意見に対して『そうだね』と共感できたり」。思春期の自分たちが、素直に反応を考える、恥ずかしい点もあるし、難しいこともあるし、意見がでなくても、感じる心と考える心が着実に身についています。思春期にある中学生の心に沿った実践だったのではないかと思います。

最後に全体を通じてお願いがあります。この東書教育賞は、現場の先生の声を聞く機会なのです。いま、教育課程の改訂時期でもありますので、どうしても上からの情報が一気に流れてくるのですが、本当はやはり現場の声を聞きたい。先生方をお願いしたいのは、やはり現場がどういうふうこれから教育実践に対する指針を出せるか。千石社長が先ほど申し上げましたように、これからの日本、たいへんな課題がいっぱいあります。

たまたま今回、兵庫県の先生方の受賞者が2

編ありました。実は、私が印象に残っている兵庫県の先生に、東井義雄先生とおっしゃる先生がいました。もう大昔の方です。学生時代に、東井先生の『村を育てる学力』という本を読みました。いま学力調査をさかんに行っていますが、秋田県や福井県といった学力調査で点数の高いところにかぎって、子どもたちは県外に流出しています。学力を高くすればするほど、県内に残らない。そこに、人口減少という大きな課題が生まれ、結果として子どもは減っていく。学校はなくなる。こういう状態がいま進行しています。私はこの東井先生の『村を育てる学力』を読み、それまでも「村を捨てる学力」というものがあつたんだということを考えたときに、この教師の炯眼、すごい眼力に感服しました。実践の中から教育を見つめている、その眼の力を東井先生はおもちでした。ぜひ先生方にも、先生方の実践の中から新しい教育指標を現場に広めていただきたい。そして来年さらに頑張っていて、この東書教育賞の発表の機会を活用いただき、日本のこれからの教育を考えていきたいと思っています。本当に本日はおめでとうございました。

ICTに関わる 論文の総評

審査委員 赤堀 侃司

受賞された皆さん、おめでとうございます。私の担当はICT部門の総評です。小学校では優秀賞の立命館小学校、正頭英和先生、おめでと

うございます。中学校では優秀賞の甲南高等学校・中学校、村上仙瑞先生、おめでとうございます。私からはその2編の講評をお話させてい

ただきたいと思います。

小学校優秀賞の立命館小学校は京都にある学校です。ある子どもから京都の観光を世界の友達に公開したいという提案があり、Minecraft（マインクラフト）というツールを使ってディスプレイの中で京都の建築物を再現しようとなった。クラフトとは、ものを作る技術や技という意味で、Minecraftは世界中で最も使われているプログラミング言語だと思っています。「清水寺」や「金閣寺」など六つの建物をつくることにし、六つのグループでそれぞれの役割を分担して、子どもたちはMinecraftで作業していく。しかも最後はアメリカのシアトルにある学校やインド、マレーシアの学校とも連携して、互いが作ったものを評価し合う国際交流にもつながったということです。

そして、私が驚いたのは留学生が来たときに英語で観光ガイドをしていることです。これもすごい学校だな、英語教育も熱心なんだと思いました。また、画面の中に、観光ガイドロボットをプログラムすることにも取り組んでいます。ロボットが実際に英語をしゃべっているのかどうか分かりませんが、小学生がロボットを分担して作っている。たぶんあと10年もすれば、この子どもたちの世界は一変するだろうと思います。AIやさまざまなビッグデータの技術が広がり、もうロボットは普通になっているのではないかという気がします。

いまでもいろいろなロボットがあります。しかし、ほとんどの小学生も中学生は、それがどういう仕組みで動いているのかは知らないと思います。そこを、将来の仕事とは別に、いまのこの世の中は、どんな仕組みで動いているのか、中身まできちんと理解していこうではないかということが、プログラミング教育の思想です。つまり、ITという道具を道具として使うだけではなくて、どんな仕組みで動いているのかを考えてみる、その仕組みを知るということを、子どもたちは観光ロボットを作るという活動の中で、体得していったわけです。

現在、たとえば掃除機でも洗濯機でも、スイッチを入れればいつも同じように動きます。電化製品のほとんどは、スイッチを入れればいつも同じように作動する。それは機械の中にその仕組みがプログラムされているからです。そのプログラムという仕組みが、この世の中を動かしていることに子どもたちは気づいていきます。そうしたことを、Minecraftを使った制作を通して、観光ロボットを作りながら子どもたちは理解していったということに、私は大変感心しました。

中学校優秀賞の甲南高等学校・中学校、村上先生の実践は、数学の授業です。事の起こりは、村上先生の記述によれば、「数学は将来役に立つのですか？」と子どもが言ったという、どこでもある疑問です。たぶん役に立たないだろうと、私も思ったことがあります。そこで村上先生が紹介したのがNIE、新聞です。新聞の中で数字の入った文章や表を読み取る力をつけ、活用することを養うため、子どもたちに自分たちがいかに漢字を知らないか、文章がわからないか、気づかせる。つまり、新聞の中に、読解力という国語の学習もあれば、数学の学習もあると気づかせていくわけです。論文中の「生徒のレポート」で紹介されたロケットの打ち上げが失敗するという記事の中にも数字がある。他にも天気予報、降水確率などいろいろな数字があり、野球を見れば打率の数字もあるでしょう。このように新聞記事の中には、実に多くの数字が含まれていることに、気づくわけです。

私はある私立大学に6年間ほど勤めたことがあります。その大学は、プロ野球の選手が出るような野球部がありまして、その学生を教えたことがあります。野球は好きだけど数学は大嫌いというその学生たちに、レポートを書かせました。レポートといっても、パワーポイントで教材を作りなさいという課題です。彼らが提出する教材はもちろん野球なんです。打率だとか、ピッチャーが投げる球のスピードだとか角度とか、詳細な数字がいっぱい入っているような教材を作るんです。なるほど、彼らは、数学は大

嫌いだけれども、こと野球になったらプロ中のプロなんですね。つまり数学は、自分がかかわる文脈や内容に常に関係しているということですね。数字だけが独立しているということはないわけです。たぶん子どもたちには、自分がかかわる文脈の中で使われている数学は、学習指導要領で言うならば、生きて働く知識になるんだろうと思います。この論文ではそこに気づかせていった非常に面白いメディアの活用ではなかったかと思います。

それからもう一つ、村上先生はシミュレーション教材を多く作られた。特にパワーポイント教材で誤答例をたくさん入れたということ。先生は気づいておられないかもしれませんが、これは大変重要なことです。代表的な誤答例を出して、なぜこれをこのように間違えたかということを経験させることは、正解を伝えるよりも、なぜ誤答したのかという頭の中のプロセスをもう一度見直すことで、自分の学習スタイルに気づかせていくわけです。この誤答例に注目した点は、非常に優れた視点だと感じました。

もう一点は、反転学習を取り入れたことです。反転学習というのは学校で用いたスライドを自宅でもQRコードをつけてスマホなどで読み取り、動画で学習することができるようにしたも

のですね。短い動画だけれども、それで授業の振り返りができ、学習習慣を身につけることができたと思える生徒が多かったことは効果があったと思います。実は、私は反転学習の研究をしばらくやったことがあり、それを私は家庭教師モデルと呼んでいます。スマホをタップしたら先生の動画が出てくる。まるですぐそばに先生がいて話しかけてくれるようなイメージですね。だからそれは家庭教師のような効果ではないだろうかと思い、しばらくそんな研究をしたことがあります。

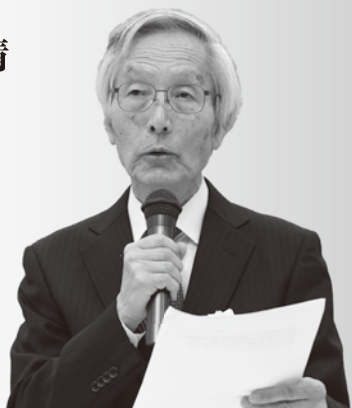
いろいろな方法で、効果は違うけれども、学習をもっと身近に、自分ごととして感じたときに、学習効果が上がり、同時に子どもの学習意欲も全然違うものになります。そうした効果も実証された点を高く評価したいと思います。

ICTは道具です。だから本来は数学や英語の学習目標に対して、どうやってICTという道具を使って支援していくかということが大切になってきます。村上先生は、その本筋をきちんとふまえてプログラミングや数学の授業をされたということに対して、私は大変感銘を受け、敬意を表したいと思います。

今日は、先生方、本当におめでとうございました。

審査委員

武内 清



I C Tを除いた全体的な感想を述べさせていただきます。一番感じますことは、応募のテーマや内容は、時代を反映したものが多いということです。

一般に学校の先生方は、学校の中にこもって、あまり時代の変化には敏感でないという傾向があると思いますが、応募される先生方は、意欲的な方が多く、何ごとにも熱心で、時代の流れや要請にも敏感になっているように思います。

今は、新しい学習指導要領の改訂で、授業や子どもの学習の仕方が大きく変化しようとしている時期です。その流れを敏感に感じとった実践が多かったと思います。

特にアクティブ・ラーニング的なもの、すなわち「主体的・対話的で深い学び」に関するものが多くみられました。この「主体的・対話的で深い学び」というのは、抽象度の高い概念なので、具体的には幅広く解釈でき、実践でもいろいろな工夫のできることを思います。それだけ、先生方の力量や実践の工夫がよく示せるキーワードのように思います。

小学校の部で言いますと、最優秀賞の田山雅博先生は「熊本地震復興数え歌」を児童に作らせるのに先哲の考え、児童同士、地域の人々との対話などを多く活用し、発表会や新聞での公開という目標も設定して、人々に感動を与えるものを完成させています。優秀賞の山本カヨ子先生は、聴覚障害児が個性に応じて主体的に学

習するさまざまな工夫を音楽（楽器演奏等）で行っています。また優秀賞の赤川峰大先生らは、卒業に関わる各活動の「思い」を各自考え、それを皆で共有することから「思い出、感謝とエール、決意」という三つの思いに集約し、主体的に卒業行事を行う実践を指導しています。

中学校の部では、最優秀賞の沼田芳行先生は朝の美術鑑賞というユニークな実践を行い、生徒が自由に表現し対話するということをされています。優秀賞の木場和成先生は、社会科の授業で、既成の時代枠にこだわらず「新しい時代区分をつくろう」という課題を生徒に提示し、生徒が歴史的事象を多角的にとらえ対話しながら歴史を深く考える実践をされています。

それらの「主体的・対話的で深い学び」の工夫、実践が高く評価されたのだと思います。またこれらの実践には、いまの時代に求められている教科横断的な視点やカリキュラム・マネジメントの視点も含まれています。これからの時代の教育に大切と感じることを二つ、申し上げたいと思います。

いまの時代、抽象的な教育論議より、具体的に実践的なことが大事だと思います。NHKの朝ドラが「モノづくり」（即席ラーメン作り）の立花萬平を描いていますが、抽象的な理論やイデオロギーではなく、実際の子どもの教育や学習の実践やその成果が問われているように思います。

もう一つは、いま、厚生労働省の統計調査が問題になっていますが、現実のデータをきちんとした方法で集め考察することの重要性です。最初に結論ありきのデータ収集ではなく、データに語らせる実践や研究が必要だと思います。

さらに、時代の要請に乗るだけでなく、各教科の独自の論理の研究や実践が積み重ねられてきていると思います。そのようなものも大切にした実践も期待したいと思います。今回も、このような要件を備えた応募の投稿が選ばれていますので、これらが日本の教育実践のモデルになり、日本の教育のレベルが一層向上していく

ことを願っています。

審査委員

壺内 明



東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。今回受賞されました先生方は、新しい学習指導要領の全面実施を見据えての重要なキーワードである「主体的・対話的で深い学び（AL）」や「カリキュラム・マネジメント」などの当面する課題に率先垂範してチャレンジし、子どもたちのためにと多くの時間を費やして研究・研修を積み重ねられ、素晴らしい成果を上げていただきました。私からは、中学校の部で優秀賞を受賞されました静岡大学教育学部附属島田中学校の木場和成先生の実践研究について講評及び感想を述べさせていただきます。

木場和成先生、おめでとうございます。社会科の授業を通して、テーマを「主体的に社会に参加する生徒を育てる単元開発」として、学びの質や深まりを重視した歴史学習の授業の在り方や単元開発に取り組まれました。歴史的分野で育成すべき思考力・判断力・表現力を「時期や年代、推移、比較、相互の関連」や「現在とのつながり」に着目して、学習過程で問題の工夫や課題追求、解決する活動を重視しながらよりよい未来を創造しようという主体的な学習活動に取り組まれた実践研究であります。

社会科に必要な不可欠な「いつ、どこで、誰に

よって起こされたか」、「前の時代とどのように何が変わったのか」、「どのような時代だったのか」、「なぜ起こったのか」、「どのような影響を及ぼしたのか」という課題を子どもたちに投げかけることによって、当時の歴史を振り返ったり、現在とのつながりはどういうところかなど、一人一人が思う存分考え、子どもたちがこれからの時代をたくましく生き、未来を創造できる育成を図っています。

歴史学習のまとめに位置づけ、歴史新聞を活用して原始・古代、中世、近世、近現代という時代区分を「政治」「生活」「文化」「外国との関係」の四つの視点を設定し、各時代を多面的に考察できるようにしました。ジグソー学習を効果的に取り入れて、「新しい時代区分をつくらう」「歴史を学ぶ意味は何だろう」という二つの課題を互いに学び合い、振り返ることで、日本の国内・国外の動きを予測させ、未来を構想しようとする態度を身につけさせました。

四つの視点から統合的に捉えることによって、日本の歩みを振り返り、これまでの日本が現代社会に与えた影響やこれからの日本の進むべきことについても考えることができます。この学習を通して、歴史学習や公民的分野への円滑な接続もより可能になりました。この「政治」「生活」「文化」「外国との関係」の四つの視点の設定によって、「日本の歴史を大観する」ことができるし、過去と現在の関係についても、主体的に考えられるようになりました。生徒のアンケートからもいままでの学習のまとめとして、四つの視点から新しい時代区分を縦、横に見ることで歴史の整理ができましたし、学習の過程で、友達の考えていることも知ることができるようになりました。日本の歩みを広い視野から捉えることができるようになったという感想は素晴らしいことです。この授業を通して、一人一人の生徒が、より深い学びができるようになった成果は何事にも変えられない収穫です。

「歴史を学ぶ意味」について、より深い捉え方ができるようになった今回の指導方法の成果

は、公立学校の授業でも十分生かすことができると確信しています。どうぞ、今後とも継続して、このような教育実践研究が続けられますよう期待しております。本日は、誠にありがとうございました。

結びに、受賞された先生方の益々のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。おめでとうございます。

審査委員

露木 昌仙



審査委員の露木昌仙でございます。受賞された先生方、誠にありがとうございます。新たな学習指導要領の趣旨についてはいまでも、いろいろお話がありました。いま移行期間ですが、昨年の4月から新たな総則に基づいて行うとされています。改訂の大きな趣旨は総則に示されているので、総則に基づいた実践がなされていなければいけないわけです。今回ご応募いただいた論文を拝見すると、どの論文も学習指導要領の新たな趣旨を押さえ、工夫されている。そのことがよくわかる実践ばかりであったことを、まずもって感じたところです。

私は小学校教育に長く関わってきましたので、優秀賞を受賞された神戸大学附属小学校6年部の、赤川峰大先生、東夏姫先生、木下翔先生の卒業単位を通した実践について所感を述べさせていただきます。この実践は広く見るとカリキュラム・マネジメントに関わる実践という見

方ができるのではないかと思います。

私も教諭として第6学年を担当したことがあります。赤川先生が卒業に関わる学習や活動として示された内容に、やはり学年で協働しながら取り組みました。すべての児童にいろいろな活動を分担し、どの児童も充実感をもてるように工夫した覚えがあります。

赤川先生は、「よくあるこのような実践」を、指導の観点を明確にし、一本の糸で括り単元を工夫、開発されました。その一本の糸は、先生の中では大きく3点あったのではないかと私は感じています。1点目は、主体的な学びを促すためには、児童に教える際に三つの点を押さえないといけないとおっしゃっている点です。まず、子どもたちにしっかり活動の意義を理解させること。それから、ただ主体的に考えなさいというのではなくて、しっかり手掛かりを与えようとしている点。そして、そのための時間をしっかり確保する。これが子どもたちに主体的に考えさせる上で重要だと明確にされている点です。

2点目に、いろいろな実行委員会に分かれて協議し、それを学年全体に提案し、子どもたち全員で協議する、子どもたちのさまざまな対話を、実行委員会ごとの内容に応じて工夫しているなど、対話的な学びということを意識した実践となっているということです。

3点目は、なんでも子どもたちが主体的に考えればいいということではなくて、教えることと児童が考えることをしっかり明確化しなければいけないとしている点です。このような3点を明確に押さえ実践している点がすばらしいと思います。

小学校におきましては、英語科の発足などに伴って、週あたりの教科の時数をどうやって工夫するかが大きな課題になっており、特別活動の時間は削減されがちな状況にあります。そのような中でしっかり特別活動の単元開発に取り組む、工夫して児童に主体的な活動をさせようとしていることは、非常に意義あることだと

思います。

何か新しいことをするのではなく、これまでの実践を構造的に整理するというあたりが、公立学校にとっても大変参考になる実践であり、大きく評価できる点ではないかと感じたところです。ご受賞誠にありがとうございます。

審査委員

鳥飼 玖美子



鳥飼玖美子と申します。本日は誠に受賞おめでとうございます。いまご紹介がありました山本カヨ子先生の論文は、聴覚障害児、つまり耳に障害があって音が聞こえない児童に音楽を学ばせる、授業でその子どもが音楽を学ぶことができるようにするという実践についてです。さまざまな試みが紹介されているわけですが、この論文がすばらしいと思えたのは、実践を支える理念です。

いま日本を含めて世界で、「多様性」(diversity)が重要であると言われています。障害のある人も健常者も、女性も男性も、文化が異なる人々も、いろいろな人たちがみんな入って多様であることが持続可能な未来につながるんだということで、多様性が重視されています。しかし最近になって、それだけでは駄目だ、「多様性」というお題目を唱えているだけでは何も起こらない、実際に差別がある、それをどうするかという問題提起がなされています。そこで、キーワードは「インクルージョン」(inclusion)。イ

ンクルード (include) する、中に入れる、日本語では「包摂」とか「包含」という言葉を使うかと思いますが、実際に社会なり組織なりに入って、その人が生き生きとのびのびと自分の力を発揮できるような環境を整えなければ、いくら多様な人々を数だけそろえても無意味であるということで、海外ではすでにさまざまな試みが行われ始めています。

山本先生の論文はその先駆けに行くようなもので、「インクルージョン」を授業で実践していると私は理解しました。これが学校教育でもっと広がり、社会で広がらなければいけないと考えています。

その観点を踏まえて全体として感じたことを、一つだけお話ししておきます。よく「柔軟性が必要だ」と言われます。もちろん教師は柔軟であるべきですが、子どもたち、生徒たちにも柔軟性は必要です。いまの世界は本当に、明日どうなるかわからない。世界が一体どうなってしまふのか、価値観でさえも根こそぎ変わってしまうような不確実な時代にあって、どうしても身につけていなければならないのが柔軟性だろうと思います。それを学校現場でどのように育成していくか。結局それは主体的であることにつながってくるのですが、多くの論文を見ますと、主体性を大事にする、生徒中心であると言いながら、やはり先生方は親切にきめ細かく丁寧に指導なさるんですね。それはよいことなのですが、手間をかけて指導していく中で、決まりや規則を作ってそのレールに乗せて生徒たちにいろいろな試みをさせる。でも、それでよいのだろうか。決まりを守ることは大事なだけけれども、日本のこれまでの教育を振り返ってみると、与えられた決まりをしっかりと守ることを求めます。けれど、不確実な時代になったときにそれだけでは対応できない。日本では当然とされている常識が世界の非常識ということもあるわけですから、児童や生徒が自分で主体的に判断し柔軟に対応する力が必須です。そういう意味で少し、世界の流れを見据えた教育のあり

方も、日々の授業の中で考えていただけると大変ありがたいという気がいたします。

先生方へこれまでのご尽力に対して感謝申し上げますと同時に、今後もそういった意味で広い視野から、不確実な時代に生きていく子どもたちが何を学んだらいいのかについて、考えていただけたら嬉しく思います。本日はどうもおめでとうございます。

審査委員

東原 義訓



東原でございます。歴史ある東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。会場の皆様方に思い出していただきたいことがあります。ご自身が中学生のころの理科の授業です。中学生としての皆さんが理科室に座っています。4人ぐらいで一つのグループを作っていたかと思います。あのころ自分は、その理科の授業の中で、どんな役割を果たしていましたか。私の隣にいたHさんは、自分からどんどん実験をやっていきました。私は彼が何をするのかなと思って横で見っていました。目の前にいる女の子は実験には一切手をつけませんでしたが、私たちは彼女を頼りにしていました。なぜかといえば、克明な実験ノートを書いてくれるからです。そして、残りの友達はいつも隣のグループにちょっかいに出歩いていました。これが、私が経験してきた理科の授業です。皆様方は、いかがだったでしょうか。

中学校の部で特別賞を受賞された中西一雄先生の研究は、すべての子どもたちが主体的に理科の授業に取り組むために、どのような役割を子どもたちにもたせたらいいかということを工夫されたものです。しかもそれを、中学1年生から3年生まで継続的に同じ手法で10回の授業にわたって実践されたことを報告され、その成果が絶大であることを示されたものです。

もう少し具体的に申しますと、たとえば植物のつくりについて勉強するときに、たとえば同じ生活グループの4人が、Aさんは根のことをしっかりやってください、Bさんは茎、Cさんは葉っぱと分担します。根のことだけを学習する子どもたちを、根の専門家として左前方に集めるんですね。茎のことを勉強する子は右後方の方に集めるわけです。そして、中西先生ご自身がお作りになったタブレットのデジタルコンテンツを使ったり、インターネットに接続したり、あるいは実験をしたりして子どもたちは進めていきます。実験をした場合には写真や動画を撮ります。

次のステップでは、自分の元のグループに戻ってきて、根を専門に勉強していた友達に、私は茎でこんなことをやったのよ、と説明してあげるわけです。もちろんタブレットを使って写真や動画を編集したものを使いながら説明します。つまり、全員がグループに戻って説明しなければならない責任をもたされてしまうわけです。これは手法としてジグソー法という名前がつっていますが、それをなされました。

そして、理科の授業や実験にやりがいがありますかといった質問をしたときに、中学3年になってから、ほとんど全員の生徒が、「やりがいがある」と答えた、そういうすばらしい実践をされました。

この実践では自然にICTが活用されています。情報活用能力はすべての教科の学習の基盤であると学習指導要領の中で位置づけられましたが、まさにそれを具現化された実践をされました。大変すばらしい、これからの見本となるような

ものです。さらに先生がお気づきになっていらっしゃることは、子どもたちがジグソー法という、ある意味で型にはまった勉強のしかたをしてしまったのでは、それでは本物ではないだろうとご自身の論文の中でご指摘されています。もっと自由にやることのほうが本当だろうと。論文を書いたあとの2学期、3学期はそれに挑戦すると書かれていますので、懇親会ではその成果を皆様に報告していただきたいなと思っていますところでございます。

次に、プログラミング教育に関する今年の論文の特徴についてご紹介いたします。

これまでは、こういう場面でプログラミングをやってみましたという論文が多かったのですが、今年は、子どもたちがプログラムをこのように改善しましたとか、共同でプログラミングしましたとか、プログラムを遠くの学校、海外にまで見てもらって、意見をもらって修正をしましたとか、そういう要素が入ってきていまし

た。それから、先生がとにかく説明してしまいがちな授業ではなく、子どもたちがいろいろ試してみ、改善して論理的に考えて、また試してみる、そのようにしてプログラミングを学んでいくスタイルをとった授業、年間を通してのカリキュラムをどうしていったらいいのかの視点をもったもの、そういうものが出てきておりました。

来年は、プログラミング教育で実際にどのような力が本当についたのかを示してくださるものがあるといいなと、個人的に期待しています。しかもそれが、これまでのような評価方法ではなく、プログラミング教育で狙っている観点から評価するような実践が出てきたらいいと考えています。どうぞお帰りにになりましたら、お隣の先生にご紹介ください。あるいはご自身でチャレンジしていただいて、投稿していただけるとありがたいと思います。

本日は、本当におめでとうございました。